文学荘論銀鈴

第貳拾貳號

銀鈴第貳拾壹號（毎月一回二十五日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可 明治四十年五月二十五日發行

銀鈴第貳拾貳號掲載目次

悪相の人（長詩）……後藤藤朗
感想欄（雑文）……くれなゐ等
旅日記（美文）……月光生
雑吟（俳句）……石櫻等
禁転載
春雨笠（短詩）……月森嶺來等
寄贈雑誌……記者
れも影（小説）……菅原紅雨
大暴風雨（美文）……素陽生
吼華を憶ふ（雑文）……河野翠波
文界片々（報導）……黒華生
五月藤（短詩）……森路桃村等
社告……

銀鈴

22

明治四十年五月二十五日發行

悪相の人

後藤藤朗

力士かまたは博打ちか、
懶げに吹く温風の
砂まく日なり秋日の

人往きしげき橋上に
悪相の人、ゐねむるよ。

力士かまたは博打ちか、
傍若無人ねそべりて
大の字なりのいぎたなさ、
赭らの顔は破れ拡に
よこたへたりな、重たげに。

見よ悪相のしれ物を
胸毛は土によごれたれ、
夜業のつかれにか、
力づくするくたびれか
解せぬ片言口にしぬ。

陽炎もゆる双の腕
隈なく彫りしほり物の
蛇いぶく醜形を
あな恐ろしと往來の
大衆は避けて急ぐかな。

旅日記

月光生

六日　伯母の家の人と相成候
床凡山へ案内すと、重治君に連られて行く。かへりがけに村君をとふ、どこかへ行つて留守に候ひき。
夜、天神町へ出づ、芝居のよせ太鼓はれぼろ夜の空に響き居り候、けふ旅立つたばかりにて、財布の底はかなりに重たけれども、夜深してはと看板ほど見てかへり候

七日　師範學校に在學中の從弟來りて、二の丸に行かずやといふ、同行して二の丸に遊ぶ、山櫻は未だ咲かず、櫻餅を騙られて食ふ、うまし。物産陳列所へも行く、欲しきもの多々有之候
寺町にて月村君に、逢ふ、一時間ばかり語りてわかる、君は明日上京さるる筈に候
午後、安來行きの渡船にて、母里なる市川君を訪ふ。宅は詩蒼たる谷間にて、夜は鳴梟狐などのなき聲にをり〳〵夢を破られ候

八日　清水寺に、詣づ彼岸櫻、木蓮など盛りに候、門番の小僧に馬場君の舍弟はどの寺にゐるかと聞く、彼の方は去年退寺したと、氣の無そうに答ふ。塔へも登り候、どこかに鶯かさへづり居候。
市川君の宅へ戻りて、急に、昨夜のさびしさを思ひ出して松江へかへり申候

九日　星ほのぼき夕に御座候
兄樣と散走して湖上のたそがれを賞し候

十日　夜、しめやかに春の雨降り候
をば樣も、姉樣も、皆〻なより集りて、兄樣に和歌新体詩などの朗讀をきき申候

十一日、碧雲湖上、波あらし
只今、歸宅いたし候、春の日にやけて色が黒くなつたと、門前のたれかれに申され候、男となんとやらは黒いが賞玩に御座候

▲次號原稿〆切六月十五日▼

春雨笠

月森神來

あゝ涙汝れこそ語れわが胸の言葉につきぬあつき思を
君を見てわれ戰きぬ我を見て君涙しぬ月出つる時
いま胸は草かれはてし秋の野を鐘の音まよふさびしさに在り
秋の雨思ひ出いたしわかれの日君が頬にみし涙ぼれえて
あが歌はたとへば戀に乙女子のくごもるに似むあはれみたまへ(翠溪の君に)

春子

鯨波のこゑせまるが如し君見つる刹那の胸のやすからぬかな
ひたよする潮の如きときめきをれぼえ心春の夜の街

福田紫雲

うち若き胸よ日にげに堪へがたき痛みぞ覺も君れもふゆゑ
夜もすがら魔性か來る心倦み胸さわぎしぬあはれ死ぬべき

後藤朗

はつ夏や圓葉やなぎの蔭にして若鮎めでぬ多摩川の里
かどろ髪すごき黒衣の形相に棕櫚みな立てりたそがれの里
御朱印船風や待つらむ錨して啞の舟子も博うちて居ぬ

東波

富も名もさびしくよわき黒の珠あつき涙に輝きは見む
みすがたは春の戸による美くしきみ聲を孕め聞かむたのしき

服部紫葉

燈臺の青き光はよりそへる二人が面に照りぬ春の夜
君つひに百合とくだけぬありし世のみすがた思ひわが心泣く

れも影

菅原紅雨

「片山静江」

僕にはなぜこの名が忘れられぬであふう！

想へばこの三年といふ長い間、絶えず僕の腦裏を往來して、最う思ふまい、忘れて了うと、何遍心で決めたかわからない、到底駄目だ、思ふまいとすれば猶更思はれる、忘れてしまはうとすれば猶忘れられぬ。一体、僕が、思ふまいとするのが間違ひであるのかも知れん、忘れてしまはうとするのが、根本的に誤つてゐるのかも知れん。それも二月三月の淺い契りの仲ならば、思ふに任せぬ世の習ひと、きれいに諦めてもしまはれう、思ひ切つてもしまはれう、が、何しろ足がけ三年といふ長い間のなじみであつたもの。何うしてそんなに斷念められるものか。

あの清しい眼、通つた鼻筋、締つた口元、ぱッてりと下ぶくれの品のよい顔つき、溢るゝばかりの愛嬌。それに、あの素直な性質、全情ぶかい精神、思ひ出してはなつかしい。

れゝ忘れもせぬ、彼が十六、僕が十八といふ、變力ともまだ濟とこ子供あがりの時であつた、戀といふ曲物に、二人が牛擒になつて了つたのは。

僕は其時ごろ、僅かな日給を貰つて、ある役所に通勤してゐたが、その途中はいつも彼の家の門先を通らねばならぬのであつた。で、朝に夕にその門先を通る、極つたやうに彼は出て逢つて呉れる、僕はそれを何よりの樂しみとして居つた。時たま彼の姿が見えぬと、何となくすまぬ氣がして、一日面白くない。考へて見ると、その頃の僕の生命は、彼であつたかも知れん いや確かに彼は、僕に對する生殺與奪の權を有つて居たに相違ない。

二人の仲は日を追ふて濃くなつて、取り遣りした文の數は、いくらであつたか分りやしない。彼から來た數ある手紙の中に、ある時、斯ういふのがあつた。今でも文句をそのまゝに記憶してをる。それは、

「れん身の心だに變らせたまはずば、身は仮令いかなる運命に服するとも、おん身につくすわが眞ごゝろの、げに誰にか移り候ふべき。」

といふのであつた。文句は短いけれども、情の籠つてゐることゝ云つたら無限だ。僕はこれを讀んだ時は、眞から嬉しかつた。我と我心で、いつまで經つても、決して變るまいと誓つた。

其う斯うする間に、一年と云ふ月日は夢の間に過ぎ去つた。其年——僕が十九の春、僕の家は、餘義ない事情から、此の地に移轉らねばならぬことになつた、が、勿論彼と一緒に行く譯には行かぬ、何うしても一旦は、彼と袂を別たねばならなかつた。

明日はいよ〳〵引き越すといふ日に、彼は僕の家を訪問して呉れた、僕が奥の間に獨り居ると、そこへ彼はやつて來た。云ひたいことは、彼にも澤山あらうし、僕にもあるが、ぢさか逢つて見ると、どういふものか思ふことが口へ出て來ぬ、彼も同じく無言でゐる。暫らくして彼は、漸々口を切つた。

「茂さん、いよ〳〵れ別れせねばならぬことになりましたね。あなたは私を行末どうして遣らうと思つてゐて下さいますの？　あなたの事であるから、お見棄てなさらうとは、夢にも思ひはしませぬけれど……もし、私を今でも他所から貰ひに來ましたなら、あなたは、どうして私を助けて下さいます？」

僕はこの問には返答に困つた、僕が彼を愛してゐることは、實際だ、命を懸けてまでも戀してゐるには相違ないが、併し僕には、行末どうせうの、斯うせうのと云ふ、そんな纏まつた考へは少しも無かつた、所が今、突然こんな問を掛けられたのであるから、何うして困らぬに居られう、と云つて曖昧なことも言はれぬから、僕はきつぱり、

「これほどまで深い仲になつたものを、なんで僕が見捨てることが出來ませう、たとひ何んなことがあらうとも、決して約束を違へやしません。あなたも其のつもりで安心してゐて下さいね。」

と云つた。

今から考へて見ると、實に無鐵砲な言草だ、乱暴極まる咄だ。何の分別もなく、唯彼を愛するのあまりに、前後も辨へず放つた言葉だ。併し、浮世の辛酸も何も知らない、言はゞ坊ッちやんのその頃の僕に、これより以上の答への出やう道がない。其夜は終夜まんじりともせず、彼の身の上を考へたり、僕の行末を想ふたりて明した。

いよ〳〵出發するといふ際には、多くの送人であつ

たから、無論彼とうちとけて話すこともならず、唯世間普通の挨拶をしたばかりであつたが、慥かに彼の瞳は、涙で曇つて居た。

その後彼からの手紙は度々來た。皆メな血を吐くやうな文句ばかりであつた。僕もその都度返事を出して、行末を樂んで待つて居れと慰めてやつた。やがてその年も暮れて、僕が二十歳の秋、両親は僕に妻を迎へよと勸めた。或ひは薄々二人の關係を覺つたのかも知れん、併し僕は、彼との約束もあるし、殊にまだ妻を迎へるには早いと思つたから斷然これを斥けた。

頻りに勸める、頑固に斷はる。到々僕は義理に負けて、心ならずも妻をへた、その時には、ほんとに身を寸斷々々に引き裂かれるやうな思ひもした。あゝ世に心ならぬ結婚をする程、つまらぬもの辛いものはあるまいと、泌々感じた、僕は彼に對してすまない〳〵を心の中で何遍繰り返したことだらう。僕は彼に手紙を遣つて、己むを得ぬ事情から、こんなことになつたといふことを知らせ、これも浮世の運命と諦め、僕の事は、すつかり忘れて、早く嫁いでくれよ、そして早く樂しいホームを作つて呉れよと、半ば慰めるやうな、半ば斷りを言ふやうな趣意を叙した。彼がその手紙を見た時には、どんなに泣いたであらう、どんなに悶へたであらう、どんなに僕を恨んだであらう。思へば僕も罪が深い。こんなことにならうとは、神ならぬ身の露知らうやうなく、深き〳〵契りを結んだことを、今更ながら口惜しいことに思つた。

四五日して彼から手紙が來た、披いて見ると、

「破れんかとばかりみ文繰り返せど……：先だつものは涙に候、遣る瀬なき思ひに攻めらるゝに候、されど、れん許樣のみ心のうちも、私能く〳〵推しはかりまゐらせ候。ことに三行半ともいふべき今日のみ文にまで、かく長々と眞心こめられしほどなれば、れん許樣を薄情なぞとは、もめ〳〵存じ申さず候。されどこのふたとせあまりの間、唯々、花咲く春の樂しさをのみ夢み候甲斐もなく、これ限りれ別れいたし候こと、何ぼう悲しうも、なさけなうも、口惜しうも候べき。げにちひさき胸の、はりさけなむばかりに候、いとしのものよとお察しくだされたく候へばされど今はいかに思ふとも、せんやうもなく候へば、わが身の不運とあきらめ、れんもと樣ご夫婦の、

れんすこやかに、れん仲むつまじう、わたらせたまはむことをのみ、蔭ながらいのりあげ候。私最早この世にのぞみなき身……賜はりし數々のみ文をれん許さまと思ひまゐらせ、一生このまゝにさびしき生活つゞけ候はむ覺悟さだめ候、あはれ不憫のものよと思し召しくだされさふらふはゞ、この上なき本望にぞんじまゐらせ候……。」

僕は、この手紙を讀んで思はず知らず、男泣きに泣いた。嗚呼可愛いさうに、彼は僕故に、一生癒えぬ心の痛手を負ふたのだ、この時の僕の心情は、經驗のない人には想像が出來ぬであらう。

それから今年で滿三年になる。妻は居りながら、子は持ちながら、月の滿つるにつけ、花の匂ふにつけ、雨ふるにつけ、風吹くにつけ思ひは絶えず彼が上に馳せる。

世にも無殘な彼は、いかに人生の果敢なきを嘆つて居るであらうか、聞けば彼は、今頃、看護婦となつて○○地に居るといふことだ。

（完）

咀華を憶ふ

河野翠澂

河井咀華は逝いた、有爲の才を抱きながら、未だ何程の成功をも現はさず、惜むべし、咀華は鎌倉に於いて客逝した。余と君とは、生前一面の識が無いばかりでなく、雙方少し面白からぬ事があつた、何故であるか、は余も知らぬ、君も恐らくろんなことを考へたことはないだらう。唯、君が親友岩崎醉芳君より、何か我々の間に蟠まつてることが有りはしないかと云つて來た外に、固より何人も這間の消息を知つたものは無いだらう、當事者の我々にさへ分らなかつた感情の衝突たもの。確か卅七年だと思ふ、同文館の原稿用紙に、例の美くしい筆蹟で手紙を呉れた時にも、余は返事一ッ出さなかつた、そればかりでない、今想へば實に濟まんことを重ねて居る。余はこゝに誌上に之を懺悔すると共に、衷心より君が夭逝を悼む、何れは相會ふて、雙方の疑團をも解決したいと思ふて居たのに、あゝ咀華は今亡い、限りなき前途の造詣を擲つて、君は「永遠」の裡にとはの安眠を求めたのだ。君があの世の祝福を涙ながらに余は禱る。

五月藤

森脇桃村

初秋や草の戸近くむしろして博うつ
人にさしぬ夕月
二十年春秋經たる氷塊もひと時に消
ぬみ息かかれば
春の雨君がしのびに人をよぶ聲とし
きゝぬ心たのしき
蝶ふたつ帆に似てもきぬ若草の青き
芽したる野のまひる時

小川石櫻

夜の霧榛の木立にしら〳〵と月のぼ
るとき君や來まさん

服部紫葉

白百合はほのにかをりてせせらぎの
ほとりに立てり君がすがたと

石橋汐波

夏の夜に涼しきかせのふくごときよ
ろこびれぼえ君を見るかな

ゆめみる人

わが心はつ夏の日天地のすがたに清
くわかみどりしぬ
いま遠く近くちまたのどよめきを聽
きぬ若葉のきりぎしにして

菅原正男

別れしも消息絶えぬみ姿のやつれま
しを夢に泣くかな
あなさびし今か消えなむすびつ火の
一縷のぞみ絶え〳〵にして
徂く春をひとりたれこめ物思ふつた
なき性とあざみたまふか
一道のひかりのぞみてわれ生くと誰
にか告げむ胸のひめごと
樂しみは運命にかこち世にそむきほ
ろびし戀の墳墓訪ふのみ
悄然と涙ながしぬ睦語る期ありやな
しやはかなき戀に
とかくして春の光りつ老いぬちむ君
をあやぶむ五月雨の家

感想欄

△僕は歌を作つて見たいと思ふが、一向其作法を知らぬから教へて呉れぬか、とか、初學者によく解る本があらば見せて呉れぬか、とか言ふ人が澤山ある、なるほど、一寸考へたら餘程六ヶ敷い規則でもあるかのやうに思はれるかも知れんが、なにそんなに面倒くさい規則などあるものでない、要は、他人の作を多く讀み、自らも放膽に作るにある、そうするうちには、自然に解つて來て、他人の妙所、苦心の痕を味ふことも出來るやうになる、それを、何のかのと、大事に思つて關はずに置くものは、生涯沒趣味な人間で終らなければならぬ、普通の素養があつて、相應に熱心にやりさへすれば、或る程度までは殆んど誰でも達せらるゝものだ。(くれなゐ)

△孔子の祭典を行つたのを、讀賣紙上で池田といふ人が嗤つたら、東川といふ人がろれに反對する、何とかいふ人が横槍をいれて東川を攻擊するといふ風で、側から見て居れば隨分面白かつた、が吾輩はどうしても池田氏の方へ加擔したかつた。(梅の舍)

△與謝野晶子女史の「樂花物語詳解批評」を讀んでは。今更ら細心精敏なる女史の觀察を嘆賞せざるを得ない、誰もが斯く、忠實に藝術の爲めに盡したふ、嘸かしと、思ふ。(柳影)

△仝じ趣向の歌でも與謝野寛氏の「ふさやかに緋の帶れへる子と行きぬ祭みる日の下加茂の橋」と田中花涙氏の「小傘してふたり可愛ゆき舞ごろも四條を越えぬ雪ふる中を」と比較して見ると、まことに宵壞の差がある(白魚生)

△湯から上つて、靜かに机の前に座つて、霞に暮れ行く春の夕景色を眺めると、實に何うも云へぬよい心持がする、殊に柳の枝のツイ机の側まで低く垂れたのが、吹く夕風にそよ〳〵ともらぐのはまた格別である。(みつ子)

△春雨濃かに軒をたゝく夕、ひとり暗澹たる燈火に對して、嬉しき空想に耽るのも、亦詩的ぢやあるまいか

△隔てない友と終日、文藝の咄などして暮らすのは、ほんとに樂しいものである。

△兄弟も及ばぬ程睦じく暮した仲を、別れてからは全く知らぬ顔をして、こちらから手紙を出しても、返事さへよこさぬものがある、あゝ世の中は、凡べてこう

いうものか知らん(霧風)

△前號の「春雨日記」面白く拜見しました、作者は、翅白さんか素陽さんかの、どちらかでせう。

△押川さんの冒險小說に、海上で二十浬先きが見えると書いてありました、實際でせうか知ゝ。

△貴社の紅雨さんはご親切な人ですねえ(濱田、春子)

△、、、うきよは浮世で憂世では無いつて——成る程浮世だ「泮や今日は向ふの岸に咲く」で、人の心も浮々として定めない世だ、それだからやッぱり憂世だ、人情の變遷常なきに泣くものは、世に尠く無い(はるさめ)

△僕が軍隊に居つた間の日記を繙いて、洗面器に一杯の水を二十分間位も待つた上、賴んで〳〵漸々貰つて、三人して僅かに面を洗つた分にしたことや、洗はずに朝食を喫したことや見た時には、在隊の親しき友の身の上を思ひ遣つて、坐ろ涙が出た。(紅涙生)

△此頃學生間に「不如歸の歌」が流行るといふことを聞いて、何んなものかと取りよせて見たら、いやはや、まことにれ嗚しにならん無類の惡作だ。こんなものを、喜んで歌ふやうでは、まだ〳〵一般青年の趣味が情けない。(一笑生)

雜吟

玉盤に音して降りぬ春の雨　石櫻
行く春や渡しの舟の女客　東波
からころと下駄行く音や春の街　芳子
楫つんで出るや春の船の人　藤朝
十善の君もれはする花見哉
初夏や近江の國の朝を行く　春子
窓外に新綠の風そよぎけり
春の月病兒を護る獨り哉　梅太
川添の水田に田螺多く居る
二人して摘むうれしさや川の芹
ほろ〳〵と蛙なく夜の臥ろなり
火鉢して草鉢をやく桃の家　朝水居
瀨戸川に尻引ッかふげ芹を摘む
芹の根に目高群れぬる水田哉
下駄の緒の切れし騷ぎや春の雨
梅に遲く桃に早しや君と住む
藪椿風なきにほろり零れけり

寄贈雜誌

▲白虹(三の一)正富汪洋の短歌に「われの詩はあぢはひ得ざる人々の評ごも見たり花散る燭に」あり呵々。されど小坂眉水馬場境外吹毛劍禪入澤凉月氏等の作篇めでたし▲皷草(一の二、三)評論及小說仲々に嬉し羊頭錄亦厭味なきを喜ぶ躰裁閑雅▲山鳩(三十八)豆鐵砲は隨分面白く無いこともないが中には偏頗の見もあり▲浮城(四の五)稻靑の三寸舌雛子郎の思ひ草等我等の好む所▲新文壇(二の三)目次は仲々の勢揃なれど明けてくやしや玉手函なり▲五月(四の三、四)例の如く俳句に力瘤を入れて盛なり▲茶話會(一)チッポケな赤色雜誌所載の文章所謂十九世紀式の舊躰也▲荊冠(二の三)大版三十餘頁なれど見るべき作篇無し內容の欺善に努め給はんことを望む▲朝虹(三の四)何うして斯う紙質がイッモ惡るい事ぞ雅雷兒の放屁錄一篇を讀む▲藻の花(三の十四)いつ見てもイヤ味なきを採る、墨滋の朝の窓は痛快▲若榮籠(十)姑らく廢刊すと云ふ「大阪文壇」の發行を待つ▲浪花(三の一)對手が子供の雜誌なれば評なし▲其他寄贈を受けたるもの△無限思潮(三の四)△明ポノ(十二)△詩文(一の二)

暴風雨

素陽生

あゝ詩的だ、痛快だ。

人は春光駘々たる春の日を愛するかも知れぬ。——たんぽぽ、れんげ草なんどの咲き亂れて居る春の郊野を愛するかも知れぬ。

然し、僕はこの大暴風雨を熱愛する、見給へ、雨雲が低く下り、遠い山、近い山、皆んな鈍黑にぼかされて、今にも大事來！と叫ばんずる氣色、實に壯大の極みではないか。

素破、風を捲いて怒號する底の雨は、ご一つと慘絕な音に出でゝ下界に臨む。と、

木がどよめく、草が靡れる、人が走る。——その一瞬時、風を交へて凄慘な響が起つ。

時は晩春の某の日、刻は暮に近い

山谷がいと俊烈に鳴り渡つたかと思ふ、途端、遠慮容赦もなく、草や木やを打つ倒し、跳ね飛ばさんず一陣風！來る！

寄手が障子にばら〳〵、ぴーんと直前する。家はもう大地震のやう、時計が止まる、手洗鉢の水がこぼれる。

いい、いと座板が鳴る。――外は一面の大暴風雨、瓦が落ちる、石が轉げる。

痛快！眞にこれ以上の詩的な光景はあるまい。

靜觀すると向ふの雜木林で、思ふほど荒れて居た風伯が、急に方向を變じて、眞一文字！　あはや、余が足下に逼らんとする。

路傍の大榎の、巨人のやうに踏張つて居るのを――何これしきをと云はぬばかりに、揉みに揉んで彼等は押し寄せた、數百年來鐵はれた老榎は、びくともすることちやない。更に新手を加へて攻め立て攻め立て襲ひ討つたが、いかなこと、貧乏搖ぎだにせぬ！

しばらく奮鬪を續けてゐたけれども、遂に彼等はこの老榎を思い切つた。同時につい近所の寺の銀杏へと鋭き鋒尖を進めた。

ばら、ばら。ばら。木の葉が散る。

根から銀杏がゆるぐ。彼等は得たりと許り攻め寄せた。――風は東から西へと吹いて居る――雨はますます激しい。

ばさあーどん。無殘なり矣。この公孫樹は風伯のために、あはれあえなき最後を遂げた。

いつとばかりに、彼等は凱歌を擧げた。が、直ぐ、ぐるりと方向を轉じて、沖の小川へ無二無三にめかゝる。

雨軍亦到る。

寄せかゝたりと思ふ間もあらせず、ほとりの水草を引き拔いて、一氣に水面に迫る――流がぴたと止まる。と、見るうちに、水はざあーとばかり、向ふの岸に豚寄されて、片方は痛々しく水底を現はした。

黑雲は、尙は西へと猛烈に動く。

時に、風伯雨師の兩勢、更に精兵をすぐつて、右翼の方、今や遲しと陣を布いた。

暗澹たる未來の戰雲は、目睫の間に――

（五月九日夕即興）

（完）

文界片々

◎河井咀華氏は客月鎌倉に於て長逝せり。

◎社友藤本晩花は肋膜炎に罹り歸鄕靜養中なり

◎社友西枯荻は去月東津輕の山々を跋涉せり

◎次號の「新小說」に藤代素人氏の長篇小說出づべし。

◎社友增野麹白は東京牛込に住す。

社告

▲選句尙未達　前號に斷り置きたる俳稿尙ほ未だ返草に接せず、照會中なれども、本誌編輯を急ぎたるため回報を待たず發行せり。

▲記事輻輳　本號記事輻輳のため丙午の雲石歌壇、文藝雜俎、句會の詠草、其他多く次號に廻せり、筆者及び讀者の諒察を仰ぐ。

▲編輯締切　本誌の編輯〆切は毎月十日に定め居れるも、〆切後續々寄稿あるため、可成採錄の方針より、漸次期日を繰延べ、延いで發行の日を衍つに至る。豫め諸君の注意を得ば幸ひ也。

▲木版畫未成　前號に約せし木版畫挿入の一義は、次號までご猶豫を請ふ。

▲和歌無料添削　返草用貳錢郵券添附下名へ送稿あるべし、一週間以內に修補の上返草す。宛名石見邑智郡田所村菅原正男。但一ヶ月二十首以內に限る

▲雜吟欄募集　雜吟欄俳句無制限募集す。半紙に淨書し多數寄稿ありたし、選者は目下囑托中、次號に之を發表すべし。

銀鈴社清規

一　文藝を愛するものは何人と雖も本社社友たることを得べし

一　社友は銀鈴誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す

一　社友は社內同人を經て本誌編輯其他の議に參與することを得

一　社友には有効期間毎月銀鈴を無代配送すべし

一　支部（社友五名以上）社友は本社直接の社友と同一の待遇を得べし

投稿募集

一　和歌　一　俳句　一　美文

一　小說　一　評論文　一　長詩

一　小評　一　小品文　一　社友月旦

一　文壇消息　一　歌會句會の詠草

用紙は半紙一枚二十行とし一行二十四字詰。種類を異にしたるものは各別紙に認むる事。〆切は毎月十日。投稿は其幼稚なるものと雖も可成補正採用す。秀逸なるものは社中同人の議を經て薄謝を贈る。社友以外と雖も投稿隨意但賞を贈らず。

銀鈴第貳拾壹號（毎月一回二十五日發行）
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可明治四十年五月二十五日發行

◉廣告◉

青年文藝
月刊雜誌

三餘の友

第一卷第三號五月廿日發行

○本會は專ら學術研究せんが爲め設け毎月一回機關雜誌を發行す
○會員をかちて名譽會員、普通會員の二とす各相當の便宜を與へしむ、
○本會員には會員の証を與へ毎月一回機關雜誌を頒布す、
○本誌掲載項目○短篇小說○普通文○書簡文○新体詩○短文○和歌○漢詩○俳句等にして毎篇懸賞を募集す
詩文添刪の求めに應ず（漢詩一首三錢 文章一章三錢）切手代用不若

○會費一ヶ月金七錢
○六ヶ月前納金四拾錢
○見本貳錢切手三枚
○郵券代用一割增

發行所 千葉縣印旛郡六合村瀬戸 青年詩文研究會

銀鈴定價表

定價	郵稅
一部 金五錢五厘	金五厘
六部 金參拾錢	……
十二部 金五拾五錢	……

廣告料
一行五號活字二十四字詰貳拾錢半頁貳圓
前金切は帶封に朱圈

銀鈴第貳拾貳號

明治四十年五月二十三日印刷
仝 四十年五月二十五日發行

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三二
編輯兼發行人 河野岩雄
仝 縣仝 郡川本村大字川本五三八
印刷人 原八太郎
仝 縣仝郡仝 村大字 仝五三八
印刷所 邑智活版所
島根縣邑智郡田所村
發行所 銀鈴社